

平成 30 年度第 2 回浜松市創造都市推進会議 議事録

日 時：平成 30 年 9 月 21 日（金）午後 1 時 30 分～午後 3 時 35 分

場 所：浜松市役所本館 8 階 第 4 委員会室

出席者：伊豆裕一会長、寺田聖子副会長、和久田明弘委員、杵屋英夫委員、谷川真美
監事

欠席者：桧森隆一委員、渡瀬充雄委員、石坂守啓委員、内藤伸二郎監事

報道関係：2 人（中日新聞社×1、静岡新聞社×1）

傍聴者：0 人

事務局：鈴木三男創造都市推進担当課長

東畑俊次副主幹、松本芙蓉明主任、松島広明主任（以上、創造都市・文化振興課創造都市企画調整グループ）、森下和之副主幹（以上、創造都市事業推進グループ）

1 開会

（事務局 松本）

本日はお忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。定刻となりましたので、浜松市創造都市推進会議の平成 30 年度第 2 回を始めさせていただきます。

本日は、過半数を超える委員にご参加いただいておりますので、会議が成立していることを報告いたします。

それでは、本日机上に配付しました会議資料について確認いたします。

（※資料 1-1～5 について配布確認）

以上でございます。不足はございませんでしょうか。それでは、ここからの進行は伊豆会長をお願いいたします。

2 議事

審議事項 1 創造都市推進会議の今後の進め方について

（伊豆会長）

それでは、議事にはいります。まず、「創造都市推進会議の今後の進め方について」、事務局から説明をお願いします。

（事務局 東畑）

（資料 1-1「浜松市創造都市推進会議の今後の進め方について」、1-2「「創造都市・浜松」推進アクションプログラムの一部改訂（案）」に基づき説明）

（伊豆会長）

ありがとうございました。ただいま説明のありました「創造都市推進会議の今後の進め方について」、何かご意見やご質問はございますか。

（杵屋委員）

創造都市推進会議は平成 31 年度までということになりますか。

(事務局 東畑)

現行のアクションプログラムの期間が平成 31 年度までになっておりますので、今までどおり事業の実施主体が自己評価をしたものを、推進会議で確認していきますが、推進会議自体は平成 31 年度以降も継続していきます。ただし、今後の進め方を先ほど説明したように切り替えていきます。

(伊豆会長)

アクションプログラムに掲載されている 115 事業やコア事業の 23 事業について、平成 27 年 3 月に策定した時点から、見直しが必要になっているとのことですね。アクションプログラムは平成 31 年度までは継続していくけれども、それ以降については、各実施主体が所管する重点事業を持ち寄って、共有していきましょうという認識でよろしいですか。

(事務局 東畑)

そうですね。今までは事業を確認するだけになっていたので、これからは推進会議の議論を活発化させるためにも、実施主体の皆さんが創造都市に資する重点事業を持ち寄って、単独では解決できないような課題などを解決するために、模索や勉強をしていくという形に変えていきたいと考えています。

(伊豆会長)

この事項については、会議の前に、私や委員の皆さんに事務局から説明があったと思います。アクションプログラムに掲載されているように、これだけ事業を行っているにも関わらず、創造都市そのものが市民の皆さんに浸透していないことも含めて、そのあたりを積極的に発信していけるような事業を選んで、産学官の連携で進めていきましょうという方向性は、委員の皆さんも反対はないと思います。ただし、具体的なことについては、これからになると思います。

(空屋委員)

私ども浜松商工会議所のなかでも、このような作業ができているかということ、できていない部分もあります。これから新しいやり方を進めるなかで、どこまでできるのかということもありますが、これは答えのないことなので、継続していく必要があると思います。

先日、市長さんに私どもの団体に来ていただいて、市長さんと語る会をやらせてもらいました。それこそ、40 年前と同じ質問が出るわけですね。市の施策で考えられていることと、市民の皆さんが考えているところに差があって、何も埋まっていないという認識を持ちました。私たち浜松商工会議所もそうですが、繰り返し情報発信をし続けないと、市民の皆さんを含めた共有化は難しいという感想をもちました。

(伊豆会長)

他に、特段の意見がないようでしたら、委員の皆さんから反対の意見もありませんでし

たので、「創造都市推進会議の今後の進め方について」承認いたします。

審議事項 2 創造都市実現に向けた支援の考え方について

(伊豆会長)

次に、「創造都市実現に向けた支援の考え方について」、事務局から説明をお願いします。

(事務局 東畑)

(資料 2 「創造都市実現に向けた支援の考え方について」に基づき説明)

(伊豆会長)

ありがとうございました。ただいま説明のありました「創造都市実現に向けた支援の考え方について」、何かご意見やご質問はございますか。

(和久田委員)

市民活動団体への支援が、これまでのみんなのはままつ創造プロジェクトだったとすれば、新しい助成事業はそれだけではないということですよ。そのことが重要だと思いますが、生涯学習の延長線上のものと、芸術文化活動は異なるということがあります。新しい助成事業は、芸術文化活動よりも軸足をもっていくのかなということがひとつあります。

それと、助成対象団体の活動について、浜松市内で活動してもらいたいということだと思いますが、誰でもいいのかそのあたりをどのように考えていますか。

(事務局 東畑)

これまでみんなのはままつ創造プロジェクトで行っていたものから完全にシフトするというのではなく、ある社会課題に対して、自分たちの力で解決したいという団体については、なるべくこれまでどおり支援をしていきたいと考えています。ただし、これまでは団体が実施することに対して支援をしてきましたが、団体だけでは解決できない課題もあるため、伴走支援者として浜松アーツ&クリエイションが専門人材とつないでいくことも行っていきたいと考えています。みんなのはままつ創造プロジェクトにおいても、開かれていない事業に対しては、採択するときに優先順位を下げていましたので、審査の基準については変えることなく、より広く社会課題の解決が市民に対して新しい価値を生み出して波及するような事業を中心に採択していきたいと考えています。それが、地域を含めた人材だけでできるのかということに対しては、市の税金で支援する以上、支援する市民活動団体や企業については、基本的に浜松市内という条件は外せないと思います。ただし、アーティストやクリエイター、デザイナーや伴走支援する専門人材については、地域外の人も関わっていただく必要があると考えています。ただし、アーティストについては、ただ創作活動を支援するのか、創作活動のなかでも、地域の市民活動団体や企業と一緒に活動するものに対して支援するのか、ということについては我々も悩んでいます。専門人材に対しては、浜松市外の方でも市内で活動していただくという支援メニューがあってもいいのかなと思っています。

(伊豆会長)

みんなのはままつ創造プロジェクトでは、金銭面の支援だけで、対象範囲も広げていたけれども、戦略的な支援が必要なので、浜松アーツ&クリエイションという組織を立ち上げたということですよね。戦略的な支援のあり方を誰が検討するのかということだと思いますが、例えば採択率を下げて芽のある団体に対しては、金額を多くするというのも考えられますし、金銭的な支援以外も考えられていると思います。そのような議論や決定権はどこがもつのでしょうか。

(事務局 東畑)

助成事業の仕立てについては、浜松市と浜松アーツ&クリエイションのある浜松市文化振興財団で、最終的には決めていかなければならないと考えています。ただし、一度決めてしまったら変えていかないかということでもなく、適宜見直しを図っていきます。採択する審査についても浜松アーツ&クリエイションだけでなく、有識者の方にも加わっていただきたいと考えています。また、採択した後はすべて団体に任せるのではなく、審査の段階で課題などを洗い出して、浜松アーツ&クリエイションのPDやPOだけで解決できないものは、外の専門人材につなげていく支援をするなど、戦略的な支援ということについては、ここにいらっしゃる委員の皆さんや外部の有識者の皆さんも含めて行っていくことになると思います。

(伊豆会長)

浜松アーツ&クリエイションの存在が非常に大きいと思いますが、そのことをミッションとして認識していただきながら、準備や活動を進められているということでもよろしいでしょうか。

(事務局 東畑)

今年度は助成事業の準備期間として、支援の対象となる団体をまわっていただき、どのような支援が必要なのかという把握をしていただきました。

(寺田副会長)

資料2に記載されている、ステージ1の地域固有の文化や資源を活かした創造的な活動が活発に行われるためには、幅広く創造都市の根源となる活動を支援していこうということで、みんなのはままつ創造プロジェクトがスタートしています。それについては、全国的にみても特徴のある事業だったと思っています。また、多くの方に喜んでいただいたと認識しています。ステージ2のその活動が新しい価値や文化、産業等の創出につながり、市民の暮らしの質や豊かさを高めていくためには伊豆会長もおっしゃったように、戦略的に取り組んでいく必要があると思います。そのために、最も重要になることは何だと考えますか。

(事務局 東畑)

市民活動団体に対するヒアリングをするなかで、課題となっていることに対して伴走支

援をすることがひとつだと思います。

(寺田副会長)

市民活動団体が自立をしていくためには、どこかと誰かとつながっていくネットワークが必要になっていくということでしょうか。

(事務局 東畑)

そうですね。それに対する支援ができることに加えて、これまでは市民の皆さんの活動だけでしたが、創造都市の実現のためには、企業やアーティストの皆さんの活動も活発化させていく必要があると考えます。

(伊豆会長)

創造都市を目指すうえで、市民の皆さんの活動の底上げを目指して、みんなのはままつ創造プロジェクトを始めたということですかね。

(寺田副会長)

幅広く捉えて創造都市を考えていこうとしているわけです。そのなかで、みんなのはままつ創造プロジェクトは、市民活動団体の自立を重く捉えたと考えていいですか。

(事務局 東畑)

そうですね。そのあたりの課題を抱えた団体が圧倒的に多いということです。

(寺田副会長)

そのような課題を抱えた団体がどこに相談したらいいのかなどを悩んでいるのではないかと思います。

(事務局 東畑)

市民活動団体同士の横のつながりがあまりないというなかで、全体を見渡すことができ、いつでも窓口が開かれているということで、浜松アーツ&クリエイションの存在意義があると思います。

(谷川監事)

私のまわりに、みんなのはままつ創造プロジェクトの支援を得た団体の方がいますが、そのような方たちをみるなかで、プロジェクトの立ち上がりの当初は、金銭的な援助を受けられるということで、個々の活動が始まったのかなという認識しています。何年か経過するなかで、活動団体同士が情報交換する場ができて、お互いのことを知って協働することもできて面白いという意見を、実際に支援を受けた団体の方から聞いたことがあります。もちろん、仕組み的な面も重要だと思いますが、自主的に活動している方たちが、ネットワークをつくっていくような装置になっていたということで、みんなのはままつ創造プロジェクトに意味があったということが、私が感じていることです。それが社会に対

して明確な発信力をもつものになっていくためには、例えばアーティストや企業、いわゆるプロフェッショナルの方たちとの関わりが今後のステップアップにつながっていくのかなと思います。それを新しい助成事業に含めるのか、そうではないのかについては、これから検討していく必要があると思いますが、みんなのはままつ創造プロジェクトについては、所定の成果があったと思います。

市民活動の質を高めていくということと、プロフェッショナルの方たちが行っている発信力や波及力のある芸術文化との間を、どのようにつなげていくかという問題についてですが、みんなのはままつ創造プロジェクトについては、市民活動の質を高めていくことが主な目的になっていたかと思います。市民活動の質が少しずつ高まっていくことが、浜松市が創造都市という名前のものに実質的になっていくことを考えた場合、手段として非常に重要だと考えます。

(伊豆会長)

谷川委員の意見を聞くと、事務局の説明にもあったように、スタートアップとしては、ステージ1は評価できる、ステージ2では最終的な目標は質だけれども、質の向上を目指すうえで、コネクション的なところに特化することもいいのではないかということでしょうか。

(谷川監事)

市民活動レベルではあるけれども、そのなかで活動する方たちが、マネジメントのノウハウを情報交換したり、浜松アーツ&クリエイションが助言するなどして、スキルアップしていくようなことがいいのかなと思います。

(伊豆会長)

交流する機会を設けることで、下から引っ張りあげられるのではないかということですかね。

(事務局 東畑)

資料2のなかで、ステージ2までしか記載していませんが、実際はさらに上のステージまで高めていくことも重要だと思いますし、芸術と呼ばれるレベルに達するためには、さらに上の上までステージを高めていく必要があるかもしれません。ただし、あくまで創造的な活動が活発に行われている都市を目指すうえで、ステージ1から次はステージ2に移行させていきたいと考えています。また、みんなのはままつ創造プロジェクトにおいて、キックオフやクロージングミーティングを通して、様々な団体が集まるなかで、団体同士の取り組みにつながった事例もありました。ただし、この方法では、前年度に事業を実施した団体と翌年度に事業を実施する団体としか接点がなかったため、そこに浜松アーツ&クリエイションが関わることによって、さらに団体同士の接点を広げていきたいと考えています。

(和久田委員)

このような話は漠然とした話になりがちですが、一般の受け手の市民の皆さんに伝えていくためには、具体的な提示や例示が必要だと思います。

(事務局 東畑)

資料 2 については、あくまで考え方になりますので、ここから支援の中身を決めていくことになります。

(和久田委員)

わかりました。みんなのはままつ創造プロジェクトについては、7年間の検証を行っていると思います。どのような活動がどのようなインパクトを与えてきたのかといったことを見せていただき、7年間でこのように変わってきた、次はこのように変えていきたいので、新しい助成制度はこのような支援をしていきますといったことが、具体的なことも含めて見せていかないと、市民の方には理解してもらえないと思います。文化振興財団の立場としては、芸術、とりわけ音楽に着目しがちになってしまっていますが、おそらく支援の対象は幅広い分野を考えられていると思います。また、浜松アーツ&クリエイションが実施した調査について、調査対象をどのように選んでいるのか、どのような課題が出ているのか、ということが報告されると聞いていますが、今ある団体にヒアリングを行っても、今あるなかの話しか出てこないですよ。先ほど支援の対象は浜松市内の団体だけですか、といった質問をした意図はそのあたりにあって、市内の既存の団体だけでなく、他のインパクトを入れないと、なかなか変わらないのではないかと思います。

(事務局 東畑)

これまでのみんなのはままつ創造プロジェクトの検証については行っていますが、その成果などが十分に市民の皆さんに伝えられていたかということ、それは我々も課題に感じているところです。本来であれば、それぞれの団体が課題に対して、このようにアプローチして、このように解決しましたということ、広く市民の皆さんに知っていただく必要があると思いますし、過去7年間の成果も情報発信していくべきだったと反省しています。

新しい助成制度については、そのあたりも踏まえつつ、分かりやすい制度にしていかなないと市民活動団体の方に利用していただけないのかなと思います。そのあたりは、ヒアリングを実施している浜松アーツ&クリエイションとともに検討していき、ある程度具体的になったところで、委員の皆さんにお諮りしていきたいと考えています。

(和久田委員)

具体性を示していくことによって、一般市民の皆さんにとって参考となる事例が積み重なって、分かりやすくなり広がっていくと思います。始めからしっかり決める必要もないし、制度も変えていけばいいと思っています。

(事務局 東畑)

我々も金銭的な支援だけではなく、伴走的な支援や各団体だけではできないような情報発信も合わせて実施していきたいと思っています。まだ活動していない団体に対してのヒアリ

ングはなかなか難しいため、先ほど和久田委員がおっしゃったように、情報発信をしていくことによって、皆さんに興味を持っていただいて、意欲のある方に制度を知っていただくことが大切なのかなと思います。

(伊豆会長)

支援の内容については、浜松アーツ&クリエイションと一緒に検討していただいて、次の会議で提示していただくということですかね。

(事務局 東畑)

そうですね。次回会議のときには、より具体的なものを委員の皆さんにお示ししていきたいと思います。

(伊豆会長)

創造都市の活性化という面で極端なことをいえば、助成事業の支援を得るからには、浜松で何千人以上が集まるイベントを実施することを、条件にするといったことも考えられると思います。

審議事項 3 調査研究事業(案)について

(伊豆会長)

続いて、「調査研究事業（案）について」、事務局から説明をお願いします。

(事務局 東畑)

(資料 3「調査研究事業（案）について」に基づき説明)

(伊豆会長)

ありがとうございました。ただいま説明のありました「調査研究事業（案）について」、何かご意見やご質問はありますか。名古屋市や神戸市の視察は、委員の皆さんにも案内があるということでしょうか。

(事務局 東畑)

そうですね。あくまで候補になりますので、資料 3 に記載されている都市全てということではありませんが、特徴的な取り組みをしている都市ということで記載しています。また、先方の都合などもありますので、事前の調整のなかで変更になる可能性もあります。

資料 3 の 1 と 2 については、勉強会ということで開催を考えていますが、委員の皆さんだけではなく、関係する団体の方にも参加していただきたいと思います。

(伊豆会長)

東海大学の河井先生は公開講座のようなかたちになるのでしょうか。

(事務局 東畑)

完全な公開というよりは、委員の皆さんを通じて、関係ある方に参加していただくということを考えています。

(谷川監事)

完全な公開は難しいと思いますが、創造都市推進会議の存在意義ということもありますし、浜松市が創造都市を目指しているものの、市民の皆さんに伝わっていないという課題がありますので、勉強会のなかでいくつかを市民の方にも公開するということも考えられると思います。どちらかというプロジェクトを考えて、そのなかで実施するイベントを市民の皆さんと共有するというのを頭にイメージしがちです。美術館や博物館などで展覧会を実施するときに、講座を市民の方向けに開催していますが、それは効果的な手法です。そのため、推進会議の勉強会についても、小出しにして公開することもありだと思います。

(伊豆会長)

それぞれバックグラウンドが異なる人材が集まることも重要だと思いますが、共通の認識をもつことで議論も進みますので、事務局のほうで我々委員だけでなく、関係する方たちも参加できるように配慮していただきたいと思います。

報告事項 1 各委員からの重点事業等の取り組みについて

(伊豆会長)

それでは、報告事項に移ります。まず、「各委員からの重点事業等の取り組みについて」、委員の皆さんから説明をお願いします。

(空屋委員)

浜松商工会議所の「平成 30 年度事業計画」とアクションプログラムのコア事業となっている「6 次産業化事業」について説明します。浜松市の会員数は、平成 30 年 9 月時点で 13,313 事業所、組織率は 5 割を超えています。この組織率は全国 1 位で、会員数も全国で 6 位となっています。

中期行動計画（第 23 期）の今年は 2 年目で、企業の元気づくり、都市力づくり、強い基盤づくりの 3 本柱で事業を進めています。企業の元気づくりは、中小企業で特に小規模企業を支援していきましょうとのことで、事業承継や創業支援を浜松市とともにお手伝いしています。それと、人材の育成ということで、人口減少とともに企業が抱えている課題として、人手不足がありますので、UIJ ターンを促進しています。昨年度に人材支援室をつくって、各大学をまわっていますが、なかなか U ターンは難しいと感じています。

アクションプログラムのコア事業となっている「6 次産業化事業」については、都市づくりではなく都市力づくりとのことで、ここに位置付けています。新たな成長市場に向けての産業基盤強化ということで、会議所のなかに「浜松地域新産業創出会議」をつくりまして、6 つの研究会の「農商工」のなかで、6 次産業化を行っています。

3 本柱の 3 つめが、強い基盤づくりということで、私どもは会員組織になりますので、常に会員に理解してもらえよう事業を進めています。最近では昭和 20 年代や 30 年代に

会員になってもらった事業所の廃業が多くて、どこの都市も同じだと思いますが、会員数はこれから減少していくことになると思います。一方で、よく勘違いされがちですが、会員だけの事業を行っているだけではなく、会員以外向けの事業も行っている組織になります。この2つを行っていかねばならないということが、難しいところです。

そのようななかで、6次産業化事業のなかの1つのプロジェクトということで、「浜松産の食材でヒット商品を作ろう！プロジェクト」を立ち上げました。全国的には立ち上げが遅かったため、全国の6次産業化の事例を研究しましたが、商品をつくっても売れている事例はほとんどありませんでした。これは商品をつくっても売り場がないという課題があるためです。そのため、浜松の場合は逆からいこうとのことで、遠州ストアや遠鉄百貨店と連携して、遠鉄の売り場における商品づくりを一緒にしましょうという逆の発想で始めました。そのようななかで、平成27年の「浜松セルリー和風ジュレ」から始まって、第7弾の「浜松産セルリー入りトマトソースコロケ」まで続けました。売り始めはほとんど完売しましたが、その後売れ続けているかということそれは簡単な話ではありません。このプロジェクトを始めた理由としては、とにかく小さな成功事例を積み重ねていきましょうとのことで、スタートしました。継続して販売している商品もありますが、なかなかヒット商品までつながっていけないということが実態としてあります。私どもは事業所により添って何ができるか、小さな成功でもいいので何か一步を踏み出そうとのことで、この6次産業化事業を行っているという状況です。

(和久田委員)

アクションプログラムに掲載されている「浜松国際ピアノコンクール」について説明します。今年の11月8日にコンクールが開幕しまして、約3週間、11月25日まで開催されます。3年に1回の頻度で開催されますが、今回が第10回目になります。1回開催するために、1億ちょっとのお金が掛かっています。評価的には第1回から徐々にレベルアップをしており、国際的に非常に認知されるようになりました。応募は300人以上からありましたが、95人に内定を出しました。その方たちが浜松を訪れ、1次審査、2次審査、3次審査などを得て、優勝者を決めていくこととなります。第7回の優勝者であったチョ・ソンジンさんは、その後のショパンコンクールでも優勝しました。

課題としましては、今でこそ浜松市民の方でピアノコンクールを知らないという人はいないと思いますが、市民の方に浸透しているかといわれると、そうではないと思います。直木賞作家の恩田陸さんの小説で、浜松国際ピアノコンクールを取り上げてくれたこともあって、また知名度が上がりました。市民の方に浸透させるためにはどうすればいいかということで、知恵を絞りまして、1次審査や2次審査で落選してしまった方たちを、ホームコンサートに招いて演奏してもらったり、それに合わせて市内の子どもたちのピアニストの発表の場を設けています。また、公認スイーツをつくるなどして、少しでも浸透するように努力しています。お金が掛かっている事業ですが、30年近く継続している事業にもなりますので、市としても継続していただきたいですし、私ども文化振興財団としてもコア事業に位置付けています。人によっては、何で自治体がピアノコンクールを開催するのかという疑問をもつ方もおられますが、年月を重ねてきて評価もいただいています。また、ヤマハやカワイ、ローランドが立地する楽器産業の街として、そこで働いている人たちが音

楽文化を支えていることも大きいので、そのような方たちを支援するという意味でも、効果の高い事業だと思います。

(寺田副会長)

新たな文化振興ビジョンの策定について説明します。現在、新たな文化振興ビジョンということで、平成31年度と平成32年度にかけて策定していきます。平成21年度に策定したビジョンが概ね10年間を展望してものとなっています。浜松という都市は、文化財などの地域資源や人材にしても豊富だと思っています。そのため、そのような資源をまちづくりや観光・産業振興等への波及効果に生かしていきたいと考えています。現在、2回目のあり方検討会が終了いたしました。現在のビジョンにおいて、どのような課題があつて、それをもとに新しいビジョンの視点に反映していくかという議論をしています。議論のなかで、若者が何に興味を持っていくのかという話（アニメなど）もありました。

次に、2020文化プログラムについて説明します。資料4-2の6.2.2に、はままつ響きの創造プロジェクト（2020東京オリンピック・パラリンピック文化プログラム）が記載されています。東京オリンピック・パラリンピックは、スポーツだけの祭典だけではなく、文化の祭典ということで、どれだけ地域性を生かして発信していくかということで国も取り組んでいます。浜松市は、はままつ響きの創造プロジェクトと名をうちまして、2018年にキップオフイベント、2019年にプレイイベント、2020年にメインイベントを開催する計画を立てています。人と人との“響き合い”による共生社会の実現などの視点をもっています。それとともに、産学官民連携の促進による地域一体となった取り組みの推進や、音楽とアートやデザイン、科学など異分野との協働による新しい価値の創造も視点に入れながら、ひとつのステップとして、創造的な活動に取り組んでいきたいと思っています。

2018年のキップオフイベントについては、9月15日に開催いたしました。クリダン2018ということで、共生社会をテーマにしたダンスを行い、車椅子のダンサーや大前光市さんにも参加していただきました。また、市民にも事前に応募を行い、出演していただきました。

浜松市は、2020年東京オリンピック・パラリンピックの事前キャンプ地として、ブラジル選手団を受け入れることが決まりました。30年にわたるブラジルとの交流があります。事前キャンプ地に誘致するにあたって嬉しかったことがあります。それは、浜松市に住むブラジルの方たちが、母国のブラジルに向けて浜松市をアピールしてくれていたことです。浜松市に住むブラジルの方が、浜松市民として浜松を愛してくれていたということです。パラリンピックについては、全競技の選手団の受け入れが決定しています。約350人の選手やコーチの方を受け入れます。これは、共生社会への新たな取り組みの一步だと捉えています。ハードもソフトもやさしい街を目指していきたいと考えています。

(谷川監事)

静岡文化芸術大学としましては、文化政策学部の「文明観光学コース」とデザイン学部の「匠領域」について説明します。静岡県からの要請ということもありますが、時代のニーズも背景にあります。具体的には次年度からのカリキュラムのスタートになります。観光については、日本全体でインバウンド需要をどのようにバックアップしていくかという

課題があります。文明観光学コースについては、1つの学科ではなく、文化政策学部全体にまたがるコースという位置付けで、カリキュラムが設けられます。匠領域については、数年前にデザイン学部のなかの学科というのを領域というかたちにして再現しております。

私自身は文化政策学部には所属していますので、文明観光学コースについて簡単に説明いたします。観光に関する学科やコースについては、既に全国の大学で設置されているところもあります。また、ビジネスの観点から観光のコースを設置している大学が比較的が多いと思っていますが、文化芸術大学のなかで観光を考えてみたときに、文化の観点から観光をバックアップする人材を育てることが、最も適しているのではないかと思います。そのため、文化の側面から観光を考えてみるというテーマで、コースが設定されていることが特徴です。

私自身が海外の世界遺産がある都市などの観光をみたときに、そのような都市は観光業が非常に重要になっていますし、若者がそのようなところで仕事として働いている姿を目にしました。観光というのは現在ある資源を観光客に示すということで、自分たちが生産するということとは異なって成立しているものだと感じました。そのようななかで、自分たちでモノをつくり出す、というところがあることがとても重要だと思いました。浜松の場合は、モノづくりの街として自負していますが、時代の変化や産業の形態が変わったとしても、浜松が持っているプライドとして、産業を成立させる人材を育成することが重要だと思っています。そのような意味で、デザイン学部の匠領域については、そのような人材育成に関わっていくということを考えますと、伝統的なイメージを持たせながら、未来につながっていく領域ではないかと感じています。具体的などころについては、専門の伊豆先生にお願いします。

(伊豆会長)

匠領域については、もともと静岡県の産業というところもありました。18歳以下の人口が減っており、学部の定員や教員増が難しいなかで、両方のコースでそれぞれ10名ずつの定員を増やします。林業だけではなく、他の伝統産業もあるということで、浜松については綿紬や注染などの伝統産業もあります。匠のコースでは、伝統建築や木工芸などがありますが、そのなかで染色も始めるということが、ひとつの目玉になります。大学のコースがひとつずつ増えるということで、様々な意味で浜松の創造的な活動にも関わることもできると思います。ちなみに、デザイン学部の領域のひとつとして、ビジュアル・サウンドがあります。アニメや漫画はこの領域に含まれます。この領域が最も学生に人気があります。それと、2020年は静岡文化芸術大学が開学して20周年の年になります。いくつかイベントを計画中ですが、また他の皆さんと連携したり、情報提供ができればと思います。

報告事項2 UCCN 報告書について

(伊豆会長)

それでは、次に「UCCN 報告書について」、事務局から説明をお願いします。

(事務局 鈴木)

(資料 4-1 「ユネスコ創造都市ネットワーク報告書 (モニタリングリポート) の提出につい

て」資料 4-2「モニタリングレポート 2014-2018」に基づき説明)

(伊豆会長)

ありがとうございました。UCCN 報告書については、事前に委員の皆さんはご確認いただいているということですね。

(谷川監事)

日本語を英語に訳して報告するというのですが、誰でも同じように訳すわけではなく、やはり上手な方とそうではない方がいます。そのため、手間かもしれませんが、良い英訳をしていただける方をお願いしたほうが、全く効果が異なってきます。

(事務局 鈴木)

可能な限り対応します。

報告事項 3 浜松アーツ&クリエイションの上半期事業報告について

(伊豆会長)

それでは、最後に「浜松アーツ&クリエイションの上半期事業報告について」、事務局から説明をお願いします。

(事務局 松島)

(資料 5「浜松アーツ&クリエイションの上半期事業報告について」に基づき説明)

(伊豆会長)

順調に立ち上がって、活動を開始しているという認識であればよろしいですか。

(事務局 松島)

そうですね。

3 閉会

(伊豆会長)

本日、予定しておりました内容は以上でございます。それでは事務局にお返しします。

(事務局 松本)

本日は会議にご参加いただきありがとうございました。

次回の開催については、改めてご案内させていただきますのでよろしくお願いいたします。

これをもちまして、平成 30 年度第 2 回会議を終了いたします。